

# 発表資料作成

## POINT

症例報告の場合



# 目次

.....

01. 『はじめに・背景・目的』の書き方

02. 『症例紹介の書き方』

03. 『介入方法・経過・結果』の書き方

04. 『考察・結論の書き方』

# 01. 『はじめに・背景・目的』の書き方 ①

「はじめに」は発表内容のストーリーを決める部分のため、非常に重要な部分です。関連領域の先行研究を調査、引用して記載しましょう。

先行研究で何が明らかになっていて、  
何が明らかになっていないのかを明確にする

例 脳卒中後の歩行能力の回復には短下肢装具 (AFO: ankle-foot orthosis) の適用が有効とされているが、既存の研究の多くは発症早期の介入に焦点を当てており、発症後6ヶ月以降の慢性期における装具適用の意義は十分に検討されていない。

# 01. 『はじめに・背景・目的』の書き方 ②

この症例検討の意義や目的を明確にする

例 慢性期では、**神経可塑性の限界や異常歩行パターンの固定化**が進み、自然回復の余地が少ないと考えられるが、適切な介入によって歩行能力の向上が期待できる可能性がある。今回、発症後6ヶ月の脳卒中片麻痺患者に短下肢装具を適用し、**歩行能力の向上を認めた症例を経験したため報告する。**

## 02. 『症例紹介の書き方』

読者に症例像と「何が・なぜ問題なのか」を伝えることを心がける

① どんな症例か？

診断名や現病歴

主訴、  
治療および経過、等  
簡潔に！

② 理学療法評価  
臨床的思考

どの時点の  
評価？

なるべく  
客観的な情報を  
使用

必要な情報を  
過不足なく  
記載する

# 03. 「介入方法・経過・結果」の書き方

いつ介入して、いつ評価したのか

どんな変化があったのか（どの時点のデータを比較したのか）

→ここが不明確だと、本当に介入の効果があったのか曖昧になってしまう

## 介入方法

- なぜその介入方法に至ったのか
- 介入方法は具体的に記載（頻度、強度など）

## 経過結果

- 2つの時点（初期評価—最終評価）で比較
- 経時的な変化を示す

# 04. 『考察・まとめの書き方』

## 考察

- ・介入によって効果は認められたのか
  - ・なぜ・どのように効果をもたらしたのか
  - ・この結果が示す新しい知見
- 
- ・考察では先行研究で報告されていることを踏まえて、今回の介入方法の意義や研究の限界について記載しましょう。

**LET'S HAVE FUN!**

